虚子記念文学館投句特選句・令和四年十二月

稲畑廣太郎　選

野鼠を襲ふ梟音も無く　兵庫　小杉伸一路

主なき部屋の残り香古暦　兵庫　武田優子

明るさを地に放り出し銀杏散る　東京　荒川ともゑ

師を偲ぶ冬日の御庭よく掃かれ　新潟　安原　葉

師の笑顔待つて下さる館ぬくし　大阪　徳岡美祢子

船団を迎へる長の懐手　兵庫　大西美知子

雑炊の味饒舌でありしかな　大阪　須知香代子

とびきりの笑顔正面冬薔薇　大阪　徳永由起子

滑り台冬日に白く傾けり　東京　宮村土々

山茶花や水音透けて偲ぶ庭　兵庫　内田泰代

入選句・令和四年十二月

小春日を睫毛に乗せて売布の巫女　兵庫　藤村とうそん
悴みて大樹をみあぐ吟行日　兵庫　島沢　平
ペダル踏む疲れた足に銀杏舞ふ　兵庫　中村幸生
小春日に記念館まで散歩かな　兵庫　横山逸瀬
虚子館で内から洗へる冬日かな　兵庫　田中燕美子
花柊ひかりのなかにこぼれけり　兵庫　井上由美子
逆転のゴール歓喜の十二月　大阪　多田羅紀子
汀子邸虚子館の空冬紅葉　大阪　谷本房子
冬ぬくし師の精魂の籠むる館　大阪　山田佳音
霜月や震災句碑の泰然と　愛知　山口こひな
水嵩も僅かに冬の芦屋川　石川　辰巳昌彦
冬紅葉雨情加はる詩心　愛知　中野ひろみ
蕪汁所望と夫の畑帰り　兵庫　山本康子
朝まだき星を嵌め込む大枯木　兵庫　川村ひろみ
葉を落としきつたる桂館の冬　大阪　加藤あや
冬の海君の言伝岩に散る　大阪　田邉育子
参道の黒石畳霜のあと　兵庫　小川孝子
松籟の冬日の揺らす汀子句碑　京都　杉森大介
再びのあの声笑顔なき寒さ　兵庫　森岡喜惠子
着膨れて言葉素直に出なくなり　大阪　立入宮子
冬の朝始発ホームの佇まい　三重　山中清茂
山寺は銀杏落葉のなすがまま　三重　池本準一
主無き館の静寂の冬ざるる　大阪　山下幸典
石蕗の黄の重すぎるとも思ふ朝　兵庫　槌橋眞美
山肌を釣瓶落しの日が滑る　兵庫　上岡あきら
今年またあつといふ間に十二月　兵庫　小柴智子
汀子師の雅を今に年惜む　大阪　林　曜子
縁側に夫の髪切る小春かな　大阪　杉山千恵子

足音の散らかしてゐる落葉径　奈良　河村久美子
思ひ出の笑顔懐かし帰り花　兵庫　黒田千賀子
冬の朝駅のうどんの湯気に混む　大阪　窪田由紀子
救はれし俳句に感謝冬さうび　兵庫　山之口倫子
満月の高々とあり冬の朝　兵庫　宮本露子
踏まれても銀杏落葉の持つ浮力　兵庫　塚本武州
この庭や河豚に倒れぬ人のこと　東京　阪西敦子
冬の朝乾布摩擦の祖父の居し　兵庫　高橋純子
金色の銀杏落葉を抜けて館　兵庫　玉手のり子
市場より活気の声する年の暮　大阪　八木　徹
久闊を叙す汀子庭冬日濃し　石川　村上秀吾
裸木の潔さにも偲ばるる　兵庫　髙野さち
かたらひの山の翳りや草枯るる　兵庫　小林志乃
ことごとく句会は中止古暦　兵庫　武田奈々（青少年）
義理堅き忘年会の顔並び　大阪　多田羅初美
この星の未来育む冬木の芽　兵庫　中井陽子
鈍色の空押し上げて十二月　兵庫　奥田好子
庭水や冷たき扉押してみる　兵庫　辻田あづき
我が例句載る月残す古暦　大阪　西尾浩子
街騒を背に六甲の眠り初む　香川　真鍋孝子
落葉踏む少し遅れて小さき靴　兵庫　池田雅かず
大綿を吹いて詰問躱しけり　兵庫　永沢達明
終章を美しく飾りてゐる木の葉　京都　山﨑貴子
水音も鳥語も響く冬の庭　石川　辰巳葉流
眠らねば山眠らねば風が泣く　兵庫　岩水ひとみ
はや鳥の庭に来てゐる冬の朝　兵庫　岸川佐江
ずわい蟹杯空くるごと味噌すする　兵庫　吉村玲子
短日や蔵書整理はかどらず　奈良　好川忠延
虚子館へ黄落の道幾曲り　香川　三宅久美子

汀子師の声は天上冬木立　香川　大山孝子
虚子館に探す一書や漱石忌　兵庫　藤井啓子
息白く星まで届きゆく静寂　鳥取　前田　千
人気なき地下一階に秘む寒さ　兵庫　深尾真理子
寒卵粥ふつふつと枕元　奈良　豚々舎休庵
水の星火の国へ宛て年賀状　石川　伊東弥太郎
誰彼を偲ぶ師走でありしかな　京都　西村やすし
一切を省略したる枯木立　大阪　河辺さち子
終結の姿夕日の枯尾花　兵庫　池田文子
冬日和汀子を偲ぶ回顧展　兵庫　松井博介
奥庭に姿正しき寒牡丹　奈良　堀ノ内和夫
霜月や汀子師の墓前まよひ来て　東京　齋藤澄子
青空を半分に切りしぐれ虹　福島　譽田若菜
師をしのぶ記念館の灯師走かな　東京　田辺て津子
俳磚に冬木の影の及びけり　東京　柿崎典子
師の墓参終へて師走が動き出す　東京　稲見康子
汀子師の在すごとなり時雨虹　東京　鈴木敬子
教会の尖塔へ向く時雨虹　東京　清水千鶴子
濃紅葉や館にみち満つ師の笑顔　東京　坂下洋子
かりがねの海越えに鳴く河川口　三重　水越晴子
記念樹の影整然と年惜む　兵庫　田村惠津子
赤も黄も地の色となり冬紅葉　兵庫　長安悦子
歓声は寒月にまでドーハの夜　神奈川　平野孤舟
思ひきりピアノ流るる聖樹船　広島　松井千博
山眠る次は笑つて逢ひたくて　兵庫　西村みどり
咳一つ畏敬の人は誌より消ゆ　兵庫　細田清子
冬の川越えて花屋の緋の中へ　兵庫　二瓶美奈子
雨が色削りて冬の芦屋川　大阪　石橋玲子
枯蔦や獲物を狙ふ解手めき　兵庫　伊藤秀子

懐手何とか自死もせず今に　兵庫　ほりもとちか
懐手ほどきいよいよ小言かな　兵庫　山口弘子
満席の句会の卓に枯芒　兵庫　岡本泰志
懐手首傾げつつ路地に入る　兵庫　山岸正子
枯尾花山風つれて卓飾る　兵庫　入谷千惠子
銀色のラストダンスや枯芒　兵庫　道中義一
聖菓賜る句座囲み初む記念の日　兵庫　キートスばんじょうし
年用意脚立かつぎて家二周　兵庫　高市敦之
隙間風辞書の余白に方程式　兵庫　太平楽太郎
春を待つ震災句碑の松林　兵庫　柄川武子
箱根路に湯立つくろがね寒玉子　神奈川　小堀公美子
金管のカンタービレや銀杏散る　香川　葛原由起
餘部の荒ぶる冬の海の声　兵庫　足立朱麻
向かひ合ひ御辞儀交はすや鴨番ふ　東京　櫻庭　寛
いろんなことがあり風に乗る枯葉　兵庫　福田光博
和ませて部屋に明るき冬の薔薇　愛知　小野　薫
リコーダー友と聖夜の四重奏　神奈川　小林　心
短日の街はや灯り五時の鐘　兵庫　伊集院秀樹
油絵に根気重ねて冬籠　和歌山　中島紀生
短日の業平橋のもう灯る　兵庫　阿曽宏之
晦日蕎麦吹きこぼす間に年跨ぎ　神奈川　金子三奈乃
師を語りその師を語り冬温し　神奈川　進藤剛至